辺境貴族の転生忍者は今日もひっそり暮らします。

Henkyou kizoku no Tensei ninja

空地 大乃
Sorachi Daidai

Illustration リッター

CHARACTERS
登場人物紹介
マガミ
銀色の毛を持つ狼。
ジンのことが大好き。
モフられると喜ぶ。
ジン
転生前は最強の忍者だった、
本作の主人公。
前世で習得した忍法を駆使して、
異世界での第二の人生を
気ままに満喫する。
スワロー
ジンの実家に仕える執事。
普段は冷静沈着だが、
怒ると怖い……？
デック
いつも元気な町のガキ大将。
特技は剣術と強化魔法。
デトラ
清楚で可愛らしい、デックの妹。
兄と違って理知的。

プロローグ

かつて日ノ本と呼ばれる国に、武陽という時代があった。
尾張の盟主である織田信長の死後、動乱の時代はなおも続き、巷では凶悪な妖怪や鬼が跋扈するようになった。
そんな時代に暗躍する、とある存在がいた。
特殊な力を用いて、要人暗殺から化け物退治までどんな仕事もこなす集団。
人々は彼らを忍者と呼んだ――

◇◆◇

あたり一面が炎に包まれていた。
仰向けに倒れる俺の体は全身が矢に貫かれ、まるで針鼠の様相。
正面に、俺の顔を覗き込む女がいた。俺が「姫様」と慕い、生涯護り通すと心に誓った女だ。
「……どうして、お願い死なないで」

「……そんな顔をしないで。大丈夫、姫様のことはこの俺が命にかけても守りますから」
「何を馬鹿なことを言うとるのだ！　お主が死ぬと言うなら妾も一緒に死ぬ！」
あぁ、そうだ。こんな姫様だから俺は……
本来、忍者は特定の勢力の下に付くことはない。金次第でどこの組織にでも属する。
負け戦なのは、もうとっくにわかっていた。だから俺以外の忍は既に全員里へ戻っていった。俺も再三、里へ戻れと言われていたが、結局この城に残り――その結果、かつての仲間に狙われることとなった。
まったく皮肉なものである。だが、昨日仲間だった者が明日には敵になるという状況は、忍にとって珍しくもないことだ。
俺はそんな環境で育った。だから、血などとっくに冷え切っていると思っていた。心などなくしたと思っていた。
だけど、この姫様が俺を変えてくれた。彼女がいたから、俺は人間になれたんだ。
それなのに――
「あなたに死なれたら元も子もない。だから、あなたは絶対に生きてください。俺の分まで――」
かつての仲間の気配を遠くに感じ、俺は姫様にそう告げた。このままだと、姫様の身も危ない。
俺は魂の力であるチャクラを練り、高速で印を結んでいく。
ほとんど残っていないチャクラを、命がけで掻き集め――

「神寄せ――黒闇天」
「え？　な、何を、嫌じゃ！　妾はお主と一緒に！」
俺が忍法を唱えた瞬間、空間が裂け、その中に姫様が吸い込まれていった。
悪いな姫様。もう俺にはこれしか術がなかった。
人外の力を借りて次元の裂け目を作った。きっと姫様は安全な場所へ飛ばされたことだろう。
『……まったく、命をかけ、この我を寄せた理由が女とはな』
「黒闇天――」
天井近くでふわふわと浮かび、俺に声をかけてきたのは、身の丈以上の長さの黒髪を有し、人間離れした美貌を持つ神――黒闇天だった。
「……悪いな、最後の願いを聞いてもらって」
『ふん、お主とは契約を交わしている身。願いとあれば聞くさ』
「あぁ、ありがとう。これで俺は安心して、逝ける」
『……勝手な男だ。まったく、人というのは脆弱なものだな』
呆れたように、しかしどこか悲しそうに呟く黒闇天。
「はは、でも、これでお前も自由だろ？　俺が死ねば契約もなくなる」
『あぁ、清々するのう、と言いたいところじゃが――なんとも癪に障る。我の見込んだ男がこんなところで死んで終わりなど、許されぬことだぞ？』

「そうは言ってもな、もうどうしようもない」
『ふむ、ならば、最後は我にとどめを刺されよ。どうじゃ？』
とどめ、か。確かに、このままかつての同胞に殺されるよりは、その方がいいかもな。
「……わかった。お前に殺されるなら本望だ」
『よくぞ言った。ならばこれで、とどめを刺すとしよう』
黒闇天が左腕を振り上げると、その手の中に一本の太刀が現出した。黒闇天の名に違わない、漆黒の刃が特徴的な太刀だ。
『これは死出の逆太刀じゃ、これでお主の現世の命を奪おう』
「はは、なかなかいい銘じゃないか。今の俺にピッタリだ」
『……であろうな。では、覚悟するがいい』
俺はゆっくりと瞼を閉じた。
その瞬間、胸が貫かれる感覚。
これが最期か。だが、不思議なものだ。心臓を貫かれたというのに、何故かそれほど痛みを感じない――
『そうじゃ、一つ言い忘れておったが、この太刀を受けた者は、死出の旅路を逆に行く。お主の肉体は確かにここで死ぬ――じゃが魂は別の世界で生まれ直すということじゃ。そして契約とは魂で行うもの。ふふ、お主がいったいどこの世界で人生をやり直すかはわからぬが、また会える日を、

そしてその時お主がどんな人間になっているか、楽しみにしておるぞ――』
薄れゆく意識の中で、黒闇天の声だけは、はっきりと聞こえていた。
肉体は死ぬが魂は別だと？　それはいったい、どういう……

第一章　転生忍者五歳児編

「おんぎゃーー！（なんでござるかこれはーー！）」

なんてこった……意識が再び覚醒した時、俺は自分自身が赤子の身に生まれ変わっていることを悟った。ついついびっくりして、ござる口調で叫んでしまった。普段は使わないけどな、これ。

死出の逆太刀の効果はこういうものだったのか……どうやら俺は、記憶を残したまま二度目の生を受けたらしい。

「〜〜〜〜〜〜ッ！」

「〜〜〜〜……」

「〜〜〜〜〜〜〜〜!?」

俺の目の前で、二人の男女が言い争っている。言葉がまったく理解できないことから、ここが異国だとわかった。表情を見るに、何か深刻な事態に陥っているらしい。

男の髪色は赤茶色で女は黒、どちらも目が青い……顔の特徴は南蛮人っぽいが、いったいここはどの国なんだ？

一応俺は忍として、他国の言語を勉強することもあった。忍はどのような環境にも、しっかり順応する必要がある。

特に言語の修得は重要度が高かった。俺が生まれた武陽の時代は、日ノ本にも異国の文化が入ってくるようになった頃だしな。地理も含めて、あらゆることを覚えさせられた。

だがしかし、その知識をもってしても、彼らの言っていることはさっぱり理解できない。

ただ、雰囲気である程度のことは推測できた。おそらくこの男女は、俺の両親なのだろう。

なんだか変な感じだけどな……そもそも俺は天涯孤独だったため、親というものをよく知らない。

二人は、何故か妙に悲しい顔をしている……まさか、俺の様子がおかしいことに気がついたとか？

いや、そういう雰囲気でもなさそうだ。

ふぅ、それにしても、黒闇天が最後に言った言葉――死ぬのは肉体だけという意味はわかった。

だからといって、赤子からやり直させることはない気がするんだけどなぁ……

◇◆◇

転生してから五年が過ぎた。最初は戸惑いも大きかったが、住めば都というのか、すぐに慣れてしまった。

この世界についても大分わかってきた。

まず、ここは俺のいた日ノ本があった世界とは大きく異なるものだった。この世界はデネアルベガというらしい。

その中で、俺は西の大陸であるアルタイルに位置する、リベルタスという国に「ジン」という赤子として転生した。

両親はエイガという姓を有する貴族で、爵位は男爵。これは南蛮で主に使われていた制度と一緒だ。日ノ本流に言えば大名といったところか。

エイガ家はいわゆる地方貴族だが、男爵家の中では名が知れており、多くの魔法士を輩出してきた由緒ある家柄らしい。

そう、魔法。魔法と呼ばれる不思議な力が、この世界では当たり前に存在する。それが俺のいた世界との最大の違いだ。魔法と似たようなことは、前世の俺も忍法や忍術でできたが、忍法や忍術が限られた者にしか使えないのに対し、魔法は基本的に一般人でも使える。

まぁ、その魔法がちょっとした面倒事を引き起こしていたりするんだけど。

「おい、無能！　今すぐこっちに出てこい！」

ほら来た、面倒事が。

自室のドアの向こうから呼ばれたので、俺は扉を開けて返事する。

「何？　兄さん」

「遅い！　呼ばれたらすぐに来い。まったく、魔力なしは動きもどんくさいのだな！」

そう怒鳴り散らしている少年の名前はロイス。一つ年上の兄だ。

この兄貴の言うように、俺には魔力とやらがまったくない。

それは生まれてすぐに行われる魔力測定でわかったことだった。魔力がないと魔法が使えないらしく、どうもその事実がこの世界――特にエイガ家にとっては致命的だったようだ。そのせいで俺は周囲から落ちこぼれ扱いされているし、父親ともギクシャクした感じになっている。

ただ、それでもこの兄貴ほどあからさまに軽蔑してくる人間はいない。こいつは俺への態度がとにかく酷いのだ。

「早く来い、グズ！」

「はい、兄さん」

面倒だったが、大人しく付き合うことにする。

屋敷の庭まで移動したところで、「止まれ」と言われた。

「今日も的にしてやる。いいか、そこを動くなよ！」

俺は言われるがままその場に立つ。ちなみに兄貴は、魔力が潤沢らしい。魔力測定をしたところ、素質ありと言われる量の三倍はあったとか。凄い凄い。

「――我が手に集え、炎の集束、朱虐の膨張、破壊の紅玉、偉大なる赤の女王は爆裂を好む……」

欠伸を噛み殺しながら、兄貴の詠唱が終わるのを待つ。

最初、魔法という単語を聞いた時は、俺もちょっとは興味を持ったものなんだけどさ。ロイスの

おかげで、今では魔法なんて正直見飽きてるんだ。
それにしても、相変わらず詠唱が長いな。詠唱だけで軽く十秒はかかってるんだが。
「――我に仇なす者に直撃せよ。炎の制裁、ファイヤーボール！」
ふぅ、やっと完成したか。
詠唱が構築されると、兄貴が突き出した右手に炎が生まれ、球体となって放たれた。
大きさは兄貴の握りこぶしくらい。六歳児の握りこぶしだ。つまりとても小さい。飛んでくる速度も遅いんだよな。矢よりゆっくりだぞ、はぁ。
俺は転生したが、三歳頃から隙を見て鍛えていたため、こんな火の玉、牛の歩みの如く遅いと感じてしまう。やろうと思えば、この間に厨房に行き、紅茶を淹れてまったり啜ったあと、戻ってくることすらできそうに思える。
そんなことを考えていたら、やっと火の玉が届いた。そして、俺の顔に命中。
ボンッ！　と出来損ないの花火みたいな音を立てて破裂し、火花が散った。全然痛くはない。
「どうだ！」
兄貴の声が耳に届く。
どうだと言われてもな……別に今に始まったことじゃないが、正直こんなものかという気持ちだ。
威力で言えば、新人忍者の下忍……いや、それ以下の忍者の見習いが練習として使用する火の忍法より弱い。あれだけ大層な詠唱で構築された魔法が、まさか見習い忍法以下とは。

最初は俺も、兄貴はまだ六歳なわけだし、子どもだから魔法も弱いのだと思った。
だけど魔法の先生曰く、兄貴のこのファイヤーボールですら、一般的な成人が扱う魔法より遥かに強力らしい。
詠唱に十秒以上かかり、速度は矢以下で、ついでに言えば有効射程は十メートル程度。日ノ本流に言えば五間あまりだが、この世界ではメートル法が浸透してるから、すっかりそっちで慣れたな。
この程度の魔法が一般レベルというのは、なんというか心もとない。こう言っちゃなんだけど、もし織田信長さんあたりが転生してたら、すぐに天下統一されちゃいそうだぞ。いや、俺がいた時代には亡くなってた武将ではあるけど、凄まじい伝説持ちだから。ホトトギス殺しちゃうから。
「うわぁ～」
そんなことを考えながら、俺はわざと吹っ飛んで地面を転がった。できるだけ痛そうに見えるようにね。
「ははは、やっぱり私の魔法は最高だ！　お前はカスだが、的には丁度いいな」
「もう、酷いなぁ兄さんは。痛たた、ふぅ」
俺は頭を擦りながら起き上がる。
これだけ大げさにやっておけば十分かな。
「じゃあ、俺は行くね」
「……待てコラッ！」

怒りの声が飛んできた。
振り返ると、兄貴がグルルゥと唸るような表情をしている。目もやたら吊り上がっていた。
「お前！　なんでそんな平然としてられるんだよ！　無能な魔力なしのくせに！」
「えぇ～？　そんなことなかったよ。痛かったよ～」
大げさに泣き真似をしてみせる。
まったく……変な因縁をつけるのはやめてほしいぞ。こっちは面倒事を避けるために必死で演技してるんだ。
「だ～！　こうなったらまだまだ魔法の練習だ！　そこに立ってろ！」
兄さん、本気ですか？　本気だな、これ。はぁ、本当面倒だなぁ……

それからしばらく、俺は魔法の練習台になり続けた。もう少し上手く演技できればいいんだろうけど、何せ威力がなさすぎて加減がわからない。あまり大げさに痛がると「馬鹿にしてるのか！」と怒られるし、理不尽だ。
俺はまだ、この世界の魔法について詳しく知っているわけではない。だけど、目の前の兄貴が天才と称される才能を持っているのは知っている。
しかし、それでこの程度か。
「はぁ、はぁ、くっ、体だけは頑丈な奴だ。今日はここまでにしてやるよ！」

十発ほどファイヤーボールを撃ったところで、兄貴はやっと諦めてくれた。それにしても、随分と疲れているみたいだ。あんな威力の魔法をちょっと撃っただけで、そんなに疲れるものなのか？
だとしたら酷く効率が悪い。下忍でも、小岩くらいなら軽く破壊できる忍法を何十発と撃てるというのに。
「お、お前、覚えてろよ！　明日も同じことやるからな！」
兄貴はそう言い捨て、屋敷の中に引っ込んでいく。
また明日もやるつもりなのか……こんな無駄なことするくらいなら、もう少しまともな修業をした方がいいと思うんだけどなぁ。
ともあれ、これで邪魔者はいなくなった。やっと自分のことに専念できるな。
……と言っても、流石に使用人や家族のいる屋敷の中でおおっぴらに修業はできない。だからって勝手に屋敷から出ると怒られるんだよな。好き勝手に出歩けないのが、貴族の面倒なところだ。
少し考えたあと、俺は屋敷の厨房に行き、お使いを買って出ることにした。そのついでに、少しくらい寄り道――という名の修業――をしたってばれないだろう。
ということで厨房に向かい、料理をしていたメイドの一人に話しかける。
「何か町での買い物はない？　僕が行ってくるよ」
「そんな！　お坊ちゃんにそのようなことを頼むわけには……」
「問題ないよ。父上も僕が家の手伝いをすることは了承している。将来のために、できるだけ庶民

の暮らしに馴染んでおく必要があるし。だから気にしないで」
「さ、左様ですか」
「それにほら、今は僕も暇だしね」
「なるほど、そういうことでしたら――」
メイドはメモに走り書きして、俺に手渡した。子どもの俺に配慮したのか、書かれている食材は軽いものがほんの少しだけだ。
よし、これでやっと堂々と外に出られる。これまではほんの少しの間、こっそり抜け出すのが精一杯だったからな。
意気揚々と屋敷を出ようとすると、背後から声をかけられる。
「ジン坊ちゃま、何かいいことでもありましたか？」
振り向くと、黒いスーツに蝶ネクタイを結んだ人物が立っていた。彼女はうちの執事であるスワローだ。
スワローは女性だが、かつて剣で随分と鳴らしたらしく、また頭もいいということで執事として雇われているんだとか。
執事というのは、いわば使用人のまとめ役だ。執事より下の使用人は、男性は従僕、女性はメイドと呼ばれており、それぞれ雑務を行っている。スワローはそれらの使用人を管理する立場。執事は普通男性が務めるらしく、女性の執事は珍しいと使用人の一人から聞いたことがあるが、そこら

辺の感覚はよくわからない。
スワローはニコリと柔和な笑みを浮かべ、こちらに近づいてきた。動きに合わせて、銀髪の毛先が揺れ動く。
真ん中分けになっている前髪の隙間からは細く整った眉が覗き、切れ長の瞳が印象的な美人である。その凛々しさから、屋敷のメイドたちからも人気が高いのだそうな。
それにしても……執事服の上からでもわかるほど、胸の膨らみが凄い。屋敷に勤めるメイドもそうだけど、こっちの世界の女性はなんというか、日ノ本の女人と比べて発育がいい。今でこそ慣れてきたが、最初は俺も目のやり場に困ったものだ。
それはそれとして、問いかけられた以上は答えないといけない。
「あぁ、これから買い物に行くんだ」
「そうですか、買い物に。ならばすぐに付き添いを……」
しまった。問題ないと思って話したけど、余計な気を回された。
「いやいや、そういうのじゃないんだ。父上にも許可されていてね、一人でお使いに行くのさ。だから気にしないでいいよ」
「ですが、道中には獣が出る可能性も……」
「そ、それは、ほら、父上から獣避けを預かっているし、大丈夫だから」
勿論これは嘘だ。むしろそんなものを持たされたら、修業の邪魔になるから置いていく。

「ですが……」
「とにかく、行ってくるね！」
スワローが心配そうにしていたけど、俺は強引に話を打ち切って駆け足で屋敷をあとにした。
屋敷の門を出てしばらくしたところで走るのをやめ、のんびり町に向かう。
これから行く町は、領主である父上の管理している町だ。ちなみにエイガ家の屋敷は、町が一望できる丘の上にある。
街道はしっかりと整備されており、昼間なら街道近くに獣が出ることはそうそうない。大昔はよく出没したそうだけど、冒険者なんかが狩りまくっているうちに、近づかなくなったのだとか。
この世界の獣はわりと賢いんだよな。獣の持つ魔力が知能を発達させているからだ、と聞いたことがあるけど、詳しいことはよく知らない。
それでも絶対に現れないとは限らないので、町へ行くには獣避けを持って歩くか、護衛つきの馬車に乗ることが多い。
ここから町までは、馬車だと三十分ほどかかる。馬車はそんなに速度を出さないし、正直俺が走った方がよっぽど速い。
もっとも、このまま普通に街道を通って町へ行く気はない。それだと修業にならないからね。
俺は街道の途中で脇にそれ、森の中に入っていった。この街道は森を切り拓いて造設したものであるため、道の左右には緑が色濃く残っているのだ。

森の中は、背の高い木が多く生えている。
よし、早速修業開始だ。
俺は内側でくすぶり続けているチャクラを解放し、全身に漲らせた。
その状態のまま、一本の木を見上げる。
高さは三十メートル前後といったところか。普通の五歳児なら、登ることすら厳しいだろう。
だが、チャクラによる肉体強化を施した今の俺なら話は別。
地面を軽く蹴って飛び上がると、俺の体はあっという間に木のてっぺんを超えてしまった。
木々を完全に見下ろしたところで上昇は停止。五十メートル以上は飛んだか。
ふむ、まさかここまで飛び上がるとは……これ多分、前世の子ども時代の俺より凄いな。
チャクラによる肉体強化は、忍術の基本中の基本だ。勿論前世でも俺は幼い頃から習得していた。
肉体強化の程度はチャクラ量によって決まり、単純にチャクラの量が多ければ多いほど、肉体もより強化される。
流石に転生直前よりは劣るけど、今の俺は明らかに大量のチャクラを持っている。
これは、転生してからしばらくあとで気がついたことである。このことについて、俺は次のような仮説を立てている。
まず、前提として、チャクラというのは魂から生み出される力だ。だから魂――つまり、精神が成長すればするほど、チャクラの量も増える。

基本的には、魂は肉体と共に成長する。つまり、幼い子どもの有するチャクラ量は少ないはずなのだ。
それにもかかわらず、俺のチャクラ量は非常に多い。これはやはり、転生が影響していると考えていいだろう。
黒闇天の死出の逆太刀により、前世の俺の魂はほとんど完全な形として残り、本来「ジン」として生まれる魂と融合した。その結果、今の「ジン」としての俺は、普通の人間より魂の力が遥かに強くなったということではないか。
まぁ、あくまで仮説であり、確かめる術はない。重要なのは、俺の持っているチャクラがとてつもなく多いということである。
せっかく受けた恩恵だ、ありがたく活用させてもらおう。
「ひゃっほ〜〜！」
そんなわけで、俺は猿みたいに木から木へ飛び移り、久方ぶりの自由を満喫する。ずっと屋敷にこもりっきりというのは性に合わないんだ。
枝を使ってくるくる回って勢いをつけてから手を離し、空中で八回転したあと、着地する。
うん、悪くはないな。前世の全盛期並みとまではいかないけど、チャクラのおかげで大分イメージに近い形で動ける。
「グルルルゥウウ――」

「お？」
どうやらお出ましのようだな。
唸り声の方を振り向くと、このあたりの森を縄張りにしていると思われる、フォレストウルフの群れがいた。数は全部で五匹か。
フォレストウルフとは、要は狼だ。日ノ本でよく見かけるやつと、姿はそれほど変わらない。
ただし、日ノ本の狼と違うのは、フォレストウルフには魔力があること。
ここで、魔力について俺が知っていることを、少し説明しておこう。
魔力というのは、世界に満ちている魔素を呼吸などで体内に取り込むことで生み出される力だ。
この世界の生物は、その魔素を魔力に変えられるんだとか。
だが、転生の影響なのか、俺にはそれができない。だから俺はこの世界の魔法が使えないというわけ。
さて、俺のような例外を除き、この能力はこの世界の生きとし生けるもの全てに備わっている。
だからこういった獣も本能で魔力を扱い――おっと！
「グルゥ！」
考え事をしていたら、一匹が飛びかかってきた。
ひらりと躱すと、鋭い爪が地面を大きく抉る。
これこそが日ノ本にいる獣との最大の違いである。日ノ本では、妖怪の類でもなければ、爪の一

撃でこんな威力は出せない。
この世界の獣は、人々にとっての大きな脅威の一つだ。
さて、どう倒そうかな……何も考えず倒すだけなら簡単だ。でも、流石にただ殺すだけという真似はしたくない。忍者は、無益な殺生はしないのだ。
確か、フォレストウルフの毛皮は、町ではかなりの高値で取引されているんだったな。屋敷にちょいちょい商人が出入りしているため、そういう話は時折耳にしている。
なら毛皮を傷つけるようなやり方は駄目だな。忍法を利用した方がいいだろう。
忍法は、チャクラを火や水、風や土といった様々な属性に変化させて行使する術だ。チャクラの性質を変化させるのはかなり大変なのだが、周りにあるものを利用して忍法を使えばチャクラの消費も抑えられる。
何もないところから水を生み出すのは難しいが、近くの水場から水を拝借してコントロールするのは簡単、という理屈だ。
そういう意味では、わりとどこにでも存在する風や土といった属性は扱いやすい。
火は周りにないけれど、慣れてしまえばチャクラで火種を作ることはそれほど難しくなく、それを利用することでチャクラの消費を抑えつつ、高い威力の火属性忍法が期待できる。
しかしここでは火の忍法を使うのは論外。毛皮も焦げるし、森に燃え移る可能性がある。
風属性は扱いやすいが、鎌鼬といった風の刃を起こす忍法は毛皮が切れてしまうため、候補から

外す。突風で吹き飛ばすという手もあるけど、回収が面倒くさい。
水属性は先ほど述べた通り、水場がないとチャクラが無駄になる。なるべく使いたくはないな。
土属性は基本的に防御に役立つ忍法が多い。土を石礫にして飛ばす忍法もあるが、毛皮はそれなりに汚れ、傷つくだろう。
「よし、ならこれだ」
俺は手の指を高速で組み換え、印を結んでいく。転生前の全盛期よりは身体能力が劣るけど、それでも三秒あれば、それなりの術の印を十種類は結べる。
印を結ぶことで、忍者はチャクラの性質を変化させることが可能だ。この世界でいう詠唱と魔法の関係に似ているかもしれない。あんなに長々唱えたりしないけどな。
「忍法・射躬雷！」
印を完成させ、俺は右手を前に突き出した。
すると、俺の右手から九本の雷が同時に放出され、目の前にいたフォレストウルフ全てを蹂躙する。
俺が使ったのは、雷属性の忍法。
雷は無から生み出された力に思えるが、実はそうではない。西洋から伝わった知識によって、雷と似たような電気というものが人にも備わっていることが明らかになったのだ。
俺は体内に流れる電気を利用したので、チャクラの消費は抑えられたというわけ。もっとも、体

内の電気を増幅させて雷に性質変化させることは非常に難しいので、里でも扱える忍は数えるほどしかいなかった。

狼は声を上げずバタバタと倒れていった。威力は体が焦げつかず、心臓が停止する程度に抑えたつもりだが、どうかな？

近づいて確認……うん、全部死んでるな。毛皮も焦げてない。

さて、ここから毛皮を剥ぐ必要がある。

強化した腕で無理やり剥がせないこともないけど、それだとやっぱり傷むだろう。

ここもやはり忍法に頼るか。

というわけで土と金を意味する印を組み合わせ、忍法・錬金を発動。

土に含まれる鉄分を増幅させて成形してっと……よし、苦無が一本できた。

苦無は忍者の持つ便利忍具の一つだ。「これ一本あれば苦しく無い」なんて言われるくらい、なんでもできる。逆に言えば、これ一本であらゆることをこなせてこそ、忍者として一人前である。

俺は苦無を用いて、五匹の毛皮を剥いでいった。

確か、フォレストウルフは肉も買い取ってもらえると聞いたな。冒険者なら冒険者ギルドに売れるらしいけど、俺の年齢じゃ無理。冒険者になれる年齢は正規で十五歳、見習いでも十二歳からと決まっている。

まぁ、素材の処分は町に着いてから考えるとして、問題は運搬方法だ。毛皮を持っていくにも何

かで縛ってまとめておきたいところだし、肉も生のまま持ち歩くわけにはいかない。一応買い物用の手さげかばんは持参しているけど、こんなんじゃ入り切らない。

だから今度は忍法・繊維錬成で、植物を材料に縄と袋を作り出した。

ちなみに、こういった道具は便利ではあるけど、込められたチャクラが切れたら形が崩れてしまう。

込めるチャクラ量によって最長十日はもつが、ひとまず今回は半日もてばいいかなって程度にしておいた。勿論、忍法・錬金で作った苦無も同様。用が済んだらあとで消しておく。

さてと、これでとりあえずはいいか。あとは道中で適当に忍術を試しながら、町に下りるとするかなっと。

「うん、飛脚の術も問題ないな」

俺は今、空中を蹴りながら森を進んでいた。

飛脚の術は忍法ではなく、忍術の一つである。忍法は印を結ぶことでチャクラの性質を変化させて放つ技で、この世界の魔法に近い。一方の忍術は、性質変化を伴わない技のことだ。

忍術の多くはチャクラを使うが、水蜘蛛の術みたいに足に特殊な道具を嵌めて水の上を歩くといった技も、一応忍術の一種だったりする。

今俺が使っている飛脚の術は、チャクラを肉体の特定部位に集中させることで強化する強化系忍術の応用で、足に集めたチャクラで空中を蹴り移動するものだ。

なお、この術はかなり習得が難しく、下忍程度じゃ覚えられない。習得の際は大抵、壁走りや接着の術で練習するとこから始める。

壁走りとは文字通り壁を走る忍術で、接着の術は壁にピッタリ足をくっつける忍術。壁と言っているけど、対象は別に木でも岩でもいい。

壁走りはチャクラで脚力を強化し、勢いをつけて走るだけだから難度は低めだ。一方で接着の術はチャクラの繊細な操作が要求されるため、難度が高い。当たり前だが、俺はどちらもできる。

飛脚を使い、上空二十メートル付近の高さを移動する。

高いところはやはり眺めがいい。チャクラで視力も強化してあるしな。

……うん？　あれって？

俺の前方には現在、目的地の町が見えている。その町と繋がる別の街道に、不審な動きがあったのだ。

目を凝らすと、馬車が複数の人間に襲われているのが見えた。馬車の護衛っぽいのが戦っているが、怪我をしているしどうにも旗色が悪そう。襲っているのは、どうせ盗賊なんだろうな。

やっぱり、どこにでもあんな連中はいるんだな。前世にもいたっけ。下級武士崩れが盗賊をやったり、凶作に見舞われた農民が仕方なく盗賊稼業に手を染めたり。大名が盗賊団を囲っている場合もあったな。勿論、忍が盗賊に堕ちる場合も存在した。

それはそれとして、一応俺もこのあたりを治める領主の息子だ。悪行を見て見ぬふりってわけにもいかない。

しかし、むやみに顔を晒したくはないな。前世でもそうだが、忍者は自分の素性を軽々しく明かしたりしない。

う～ん、しょうがない。

地上に下り、忍法・繊維錬成で頭巾を作る。前世でよく被っていたような黒頭巾だ。

さて、急ぎだからここはっと――

「忍法・疾風迅雷――」

印を結んで忍法を唱えた途端、俺の全身から電光が迸り、一気に加速。音を置き去りにするほどのスピードで目的地へ向かった。

これは、全身に雷をまとい移動速度を上げる忍法。その速さはまさに雷の如しといったところで、長い距離を一瞬で移動したい時は重宝する。

木々の間をすり抜け猛スピードで移動し、あっという間に到着した。

護衛は二人。盗賊の方が数は多い。

護衛の一人は女で、馬車を背にして、矢が深々と突き刺さっている肩を右手で押さえていた。顔色が悪いな。

もう一人の護衛は中年の男性で金属製の鎧を装備しており、今は片膝をついている。戦意は失ってないようで剣を持ってはいるけど、苦しそうだ。

それを見下ろす敵は、毛皮を身にまとった厳つい男。随分とごつい曲刀を振り上げ、今にも斬りかかりそうな状況だ。

周りには他に四人の仲間がいて、それぞれ弩を手にしたり杖を持っていたりする。

状況はよくないが、ま、なんとかなるか。

俺は忍法・錬金で作製しておいた苦無を投げつけた。

風を切って飛んだ苦無は、曲刀を振り上げていた男の腕に命中した。

「がっ！　な、なんだ！　誰だ！」

「通りがかりの忍だよ」

「は？」

利き腕を押さえている男の正面に移動し、チャクラを集束させた掌底を肋に叩き込む。

「ぐふぇ！」

呻き声を上げ、男の体がくの字に曲がった。口から汚い液体を吐き出しそうになっていたから、顎を殴って強制的に閉じ、ジャンプして頭上から蹴りを落とす。

男の顔が地面にめり込んだ。

「か、頭が！」

「い、いったいどうなってやがる！」

周りの盗賊が狼狽え始める。
え？　こいつが頭なのか？　いやいや、弱すぎでしょう。最初の掌底――集束させたチャクラを叩き込む通破の術をお見舞いしたとはいえ、そんなに強くやった覚えはないんだけどな。
「「「てめぇ、ぶっ殺してやる！」」」
四人の盗賊が、揃って頭の悪い言葉を口にし、襲いかかってきた。前衛役らしい二人の一方は斧、もう一方は槍を振りかぶり、後衛の一人は弩で矢を放ち、もう一人の杖持ちは魔法を詠唱している。
魔法は詠唱に時間がかかるから後回し。飛んできた矢は指でキャッチして撃ってきた本人に投げ返しておく。
弩を持った男が倒れたのを確認していたら、斧と槍が眼前に迫ってきた。
……忍法を使うまでもないな。
斧を持つ盗賊と槍を持つ盗賊の腕に左右の手を当て、それぞれの軌道を逸らす。
その結果、斧持ちと槍持ちは互いに攻撃し合い、同士討ちとなる。
「ギャッ！」
「いてぇえええぇよぉおおお！」
二人の盗賊は悲鳴を上げて地面を転がった。いや本当、もう少し根性を見せようぜ。
「――受けよ風の洗礼を！　ウィンドカッター！」
――パシン！

俺が余裕で他の三人を倒した頃になって、ようやく杖持ちが詠唱を終えて魔法を飛ばしてきた。ただ、飛んできたのが手裏剣――しかも比較的小さなやつ――と同程度の風の刃だったから、つい手で払っちゃった。
そしたらあっさり魔法は霧散した。よわ……手もまったく傷ついてない。
「……は？」
いや、は？　じゃねぇし……
魔法の才能があるという兄貴の魔法も呆れるほど弱かったが、こいつのはもっと酷いな……こんな魔法、使う意味あるのか？
「一応念のために聞くけど、今のは手加減してくれたの？」
「ば、馬鹿言え！　俺は全力でやった！」
「あっそ」
「ガハッ……」
もうこれ以上話しても仕方ないから、杖持ちに速攻で近づいて、当て身で気絶させた。
ふぅ、やれやれ。しかし……この程度の腕で、よく盗賊なんてやる気になったな。
「あ、あの……ありがとうございます」
「……助かったよ。本当に危なかった」
と、馬車の護衛と思しき二人が、近づいて礼を述べてきた。男の方は、俺が頭巾を被っているせ

いか怪訝そうな表情を浮かべていたけど、助けたことには感謝してくれているようだ。
顔を隠した状態で猫を被った話し方をするのも意味ないよな。普通の口調で返事するか。
「……たまたま通りかかったから助けたまでさ」
「そ、そうか。しかし貴方はいったい……顔はわからないが、ノームだったりするのかな？」
男がそう尋ねてきた。
ノームというのは、この世界の種族の一つだ。背が低く、大人になっても人間の子ども程度までしか身長が伸びないとされていて、足が物凄く速いらしい。
他にも、ドワーフやエルフなんて種族もいるそうだ。会ったことはないが、屋敷の本を読んでいるので、そういうのは知識として知っている。
人間の子どもは普通こんなに強くないし、向こうがこちらをノームと勘違いするのも無理はない。
「悪いが、あまり素性を語りたくないんだ」
「そ、そうか。まぁ助けてもらっておいてあまり詮索するのも失礼だったな」
「わかってくれたならいい。それより……怪我は大丈夫か？」
彼らの容態が気になって、ついつい聞いてしまった。
「問題ない。見た目ほど深刻なものじゃないからな」
男が答えた時、馬車の中から恰幅のいい男が出てきて、話に加わった。
「積荷の中にポーションがあるので、それを使いましょう」

そう言った男は、赤くて裾の長い、ゆったりとした外套を羽織っていた。足には革製の高そうなブーツ。いかにも商人っぽい見た目である。
どうやら、この馬車は商売品を運んでいたようだ。護衛をつけているのも頷ける。
商人の男は荷の中からポーションを出して二人に渡した。なかなか気前がいいな。
ポーションはこの世界における便利道具の一つで、薬草などを煎じて作る薬だ。これを飲むと、ちょっとした怪我ならすぐに治ってしまう。怪我の程度が酷い場合は、患部に直接かけてやることで重点的に治すこともできる。
ちなみに、この世界には治療魔法なんてものもある。前世にも医療忍法を使う者はいたが、使い手はかなり限定されていた。こちらの世界だと、教会に属する者なら、程度の差はあれど大体使えるようだ。
「さて、どなたかは存じ上げませんが、助けてくださりありがとうございます。ぜひとも何かお礼を差し上げたいのですが」
商人の言葉に、俺は首を横に振って応える。
「お構いなく。偶然見かけたまでなので」
「しかし、それでは私の気が収まりません」
「そう言われてもな……」
気前がいいだけでなく、なかなか律儀な商人のようだ。

だけど、お礼なんて言われても……いや、待てよ。
「……それなら、これを買い取ってもらうことは可能か？」
丁度いいかもしれないと思い、俺は持っていた毛皮と肉を見せて尋ねた。
「ほう、これはフォレストウルフですな。ふむ、しかしこれはなんと上質な……毛皮はとても状態がよく、肉もしっかり血抜きされている」
毛皮と肉を見て、感嘆の声を上げる商人。
護衛の男女も覗き込んできた。
「あぁ、本当にこれは大したもんだ。冒険者の中でも、これほどしっかり処理できる奴はそういない」
「本当、鮮やかなものね」
自分では普通に処理しただけのつもりなんだけどな。
しげしげと眺めたあと、商人が口を開く。
「これだけの品ならば、そうですね――助けてもらったこともありますし、大銀貨二枚で引き取りましょう」
大銀貨二枚か。結構なお金になったな。
この世界では、銅貨、大銅貨、銀貨、大銀貨、金貨、大金貨という貨幣が使われている。一番価値が低いのが銅貨で、十枚ごとに次の貨幣へと価値が繰り上がる。大銀貨は銀貨なら十枚分、銅貨

なら千枚分だ。貴族家に生まれたから詳しいお金の価値はまだよくわかってないが、かなり色をつけてもらったのは理解できる。
「わかった。それなら助かる」
「ではこれで」
俺は毛皮と肉を手渡し、代わりに大銀貨二枚を受け取る。おかげで随分と身軽になった。
「もし町まで行かれるなら、ご一緒にいかがですか？」
商人がそう言ってくれたが、俺は首を横に振った。
「いや、俺は他にも寄るところがあるから。ところで、この盗賊たちは大丈夫か？」
「あ、あぁ。適当に縛って馬車に運んで、冒険者ギルドに引き渡すつもりだ」
護衛の男が言った。
ふむ、冒険者ギルドに連れていくということは、やはり護衛は冒険者だったか。さっき毛皮と肉を見ていた時も冒険者がどうとか言っていたよな。
護衛の仕事は、冒険者ギルドでは一般的な依頼だと聞いたことがある。あらゆる依頼をこなして報酬を受け取って生計を立てている点は、俺たち忍に似ているが、どちらかというと冒険者は用心棒に近い。忍は冒険者と違って、表立って活動しないからな。
「そうか、なら俺はもう行くよ。流石にもう危険はないと思うけど、気をつけてな」
「あぁ、俺たちにも意地がある。もうこんなヘマはしないさ」

俺は助けた商人たちに別れを告げ、一旦その場を離れた。
と言っても、実際は俺も町に行くんだけどね。

町の入口に着いた。一人でここまで来るのは初めてだ。
ちなみに、頭巾は取ってある。あんな頭巾を被ったまま町に入るわけにはいかないしな。
この町は周囲を高い壁に囲まれている。高さは十メートルくらいか。
日ノ本ではこんな高い壁で町を囲むことなんてなかったから、なんとも慣れないな。土塁や石垣くらいはあったけど。
さて、そんな壁に囲まれた町だから、入るには各所に設けられた門を通ることになる。
俺がいる門の前には、二人の門番が立っていた。
黙って入ろうとすると引き止められたが、俺の顔と服にある紋章を見て、門番の一人が目を真ん丸にして声を上げる。
「これはこれは、まさか領主様のご子息がお一人で来られるとは！」
町に入る際は、基本的に身分の証明が必要になる。商人や冒険者なら、それぞれのギルドから発行される証明書があればすんなり通れるが、それ以外の人間だと根掘り葉掘り質問された上、通行料を取られる。
その点、俺の場合は家紋や顔ですぐに素性がわかってもらえるから便利だ。

「しかし今日は何用で？」
「あぁ、お使いで来ただけだよ」
「なんと！　わざわざご子息だけで自ら？」
門番がのけぞった。いちいち動きが大げさな男だな。
とりあえず、頷いて返事する。
「これも学びの一つだよ。とにかくそういうことだから、もう行っていいかな？」
「お待ちください。それなら護衛を……」
「いやいや！　いらない、いらない！　本当に大丈夫だから！」
「ですが、もし何かあったら――」
それから門番とすったもんだあったが、なんとか一人で町に入ることができた。それにしても、やたらおしゃべりな門番とは対象的に、もう一人は微動だにしなかったな。
ふぅ、でもこれは帰りも面倒そうだな。お使いを済ませたら、もう壁を飛び越えて帰ってしまおうか。確かに高い壁ではあるけど、チャクラを使って肉体を強化すればわけはない。
まぁ、それはあとで考えるとして。
俺は改めて町を見る。
この町の名前はエガという。落ち着いた雰囲気の漂う、のどかな町だ。昼は町人が畑仕事に出ていたり、町の外の採掘所に行ったりしているから、なおさら静かに感じる。

採掘所といったが、エイガ家の治めるこの領地には、魔石を採掘できる鉱山がある。魔石採掘は、この領地での主力産業だ。
魔石は、主に魔法の効果を上げる装身具や、杖の材料になるらしい。
男爵家が治める町としては、エガはわりと大きい方なのかも。あくまで、俺が得た知識と照らし合わせた上での意見だけどね。
領地を持てる爵位の中では、男爵は一番下位だ。男爵より下には、騎士になった時点で与えられる騎爵や、名誉爵とも呼ばれる準男爵があるが、これらの爵位では領地は持てない。
多くの男爵は小さな村落を一つないし二つ治めるくらいなんだけど、エイガ家は魔法関係の功績が国から認められているから、鉱山や町を含む領地を治めている。
さて、それはそれとして、目的を達成しないとな。買い物、買い物っと。

お使いはあっさり終わった。まぁ、子どもに任せる程度の買い物だ。そんな難しいものじゃない。メイドはメモまで用意してくれたけど、その場で暗記できる程度の量だったし。
あとは帰るだけだな、と思って門に向かおうとしたら……
「これはこれは、こんなところで会えるとは奇遇ですなぁ」
見知った顔の少年が近づいてきた。
こいつは……うちに出入りしているバーモンド商会の会長の息子だな。

バーモンドは膨らみのあるズボンを穿いて、ドレスシャツに赤いベストといった出で立ち。眼鏡をかけた小柄な出っ歯少年であり、キノコみたいな髪型をしている。特徴のある顔だから、一度見ただけで覚えてしまった。
バーモンドは、三人の少年を従えていた。
そのうちの一人がバーモンドに話しかける。
「おいラポム、こいつが噂のエイガ家の落ちこぼれか？」
ラポムとは、バーモンドのファーストネームだ。
「あぁそうだ、デック。こいつがロイス様の愚弟、ジン・エイガさ」
嘲るような口調でバーモンドが答えたあと、腰に小ぶりな木刀を差した少年と杖を持った少年が小馬鹿にしたように言ってくる。
「確か、数多くの優秀な魔法使いを輩出したエイガ家において、とんでもない落ちこぼれとか？」
「魔力測定の時、あまりに魔力が少なすぎて計器が動かなかったって話だよな！」
大柄なデックと呼ばれた少年は、腕を組んでジッと俺を見下ろしていた。揃いも揃って、いかにも悪ガキと言った様相である。
「……それで、なんの用なのかな？」
丁寧な口調で、一応用件を尋ねてみる。
口ぶりからして、碌な用件じゃないんだろうけど。

「いやいや、自分もエイガ家に出入りしている身ですからね。姿を見かけたので、一応ご挨拶くらいはと思いまして。しかし、驚きましたなぁ。仮にも領主様の息子が、護衛もつけずこんなところまで一人で買い物とは」
嫌味ったらしくバーモンドが言った。
やれやれ、俺が買い物している時に感じた視線は、こいつらのものだったか。
実はお使い中、ずっと誰かがこちらを見てきていた。殺意は感じなかったから放っておいたけど、買い物を見るなんて、どんだけ暇人なんだか。
「まぁ、将来のためにも経験は積んでおかないと」
俺が言うと、悪ガキ共は口汚く罵ってくる。
「プッ、将来のためにってマジかよこいつ！」
「町までわざわざ買い物だなんて、やってることは召使いと一緒じゃん」
「領主の息子のくせに、お前そんなことやらされてるの？」
まったく、やかましい連中だ。
「いやいや、そんなに馬鹿にしてはかわいそうですよ。確かに彼には魔力が全然なく、ロイス様と違って将来領地を継ぐ立場でもなければ、優秀な魔法士になれる素質もありません。だからこそ、こうやって奴隷の真似事をして、将来家を出る時のために頑張っているのではないですか」
すると、バーモンドは俺を小馬鹿にするようにそんなことを言ってきた。にやついた顔に性格の悪さが滲み出ている。
子どものうちからこんなんで、俺としてはお前の将来の方が心配だぞ。
とりあえず、今のが失言だったってことは遠回しに伝えておくか。
「あぁ、まったくもってその通りだよ。うちの領地は兄さんが継ぐだろうし、将来のために世間のことを知っておかないといけないのは事実だ。ただ、うちで働いている使用人たちはみんな立派な人ばかりだよ。そんな彼らに仕事を任されたことを、僕はとても光栄に思っている。だから、君たちが彼らを召使い、奴隷呼ばわりするのは、あまり愉快じゃないかな」
そこまで言うと、彼らは気まずそうに口をつぐんだ。
こいつらは俺の悪口を言っているつもりだったんだろうけど、「召使い」「奴隷」という言葉はエイガ家の使用人まで馬鹿にする表現である。それは間接的に、エイガ家そのものの格を貶めることになるわけで、仮に他のエイガ家の関係者に聞かれたらどうなるかわかったもんじゃない。反省してくれるといいのだが。
「……いやいや、別に使用人の仕事を馬鹿にしたわけではありませんよ」
バーモンドが取り繕うように言った。ま、そう言うしかないよな。
「そう、それならよかった。なら僕は行くね」
そのまま連中の横を通り過ぎようと歩きだす。
「……ですが、使用人に任された仕事を、仮にも領主の息子である貴方がまったくこなせなかった

ら、家の方々はどう思いますかね？」
すれ違う直前、バーモンドが眼鏡をクイッと上げ、口角を吊り上げてそう言うのが聞こえた。
すると、その言葉が合図だったかのように、デックがこちらを転ばせようと足を出してくる。その勢いは蹴りに近い。
「大丈夫――」
「え？」
俺が言うと、デックは目を丸くさせ、思わずといった調子で声を上げた。
引っかけてこようとしたデックの足を躱したのだ。こんな見え見えの手に引っかかるわけないっての。
「――流石にお使いくらいは失敗しないさ」
「チッ、運のいい奴め！」
舌打ちするデック。いやいや、運とかじゃないし。
「こうなったらおい！　アレを使え！」
「イェッサー！」
「喰らえ！　泥の洗礼！」
デックに言われ、取り巻きの少年二人が泥団子（どろだんご）を取り出して構えた。あんなものわざわざ用意してきたのか……

「フッフッフ、この特製泥団子は、外側は固いが中は柔らかくドロドロなのさ。お前の買ったものを台無しにしてやる！」
デックも泥団子を持ち、得意そうに言う。
「おやおや、これではお使いの品が泥だらけになって大変なことに。薄汚れた情けない姿で帰ることになるんでしょうなぁ」
バーモンドがニヤニヤしながら言った。このあたりは本当、子どもの発想だな。くだらねぇ～。
四人は俺の前後左右に一人ずつ立って取り囲んできた。バーモンドだけが泥団子を持っていない。他の三人より俺との間隔が離れているし、高みの見物を決め込むつもりなのだろう。
「オラオラオラオラ！　お前らも投げろ投げろ！」
デックたちが泥団子を投げ始める。
「ブベッ！　ベッ！」
三人の投げた泥団子は見事に命中した……バーモンドの顔面に。
「「あれ？」」
「な、ど、どこ狙ってるんだよ！」
「いや、悪いな。でも、あれ？」
バーモンドが怒鳴り、デックは謝りつつも首を傾げた。
どうやら奴らは全然気がついてないようだが、飛んできた泥団子の軌道を、俺が全て指で弾（はじ）いて

逸らしてやったのである。
その結果、バーモンドは泥まみれの顔に。勿論狙ってやったことだけどな。それくらいの意趣返しは許してほしい。
「く、くそ！　投げろ投げろ！　おりゃ！」
「とりゃ！」
「でい！」
「ぶべっ！　ぶぼっ！　げへっ！」
三人の投げる泥団子は全て、俺が軽く指で触れるだけでバーモンドに向かって飛んでいく。こんなの、忍術を使うまでもない。本当になんてことない指の動きだけで十分だった。
「や、やめろ！　いいかげんにしろ！　お前ら僕に恨みでもあるのか！」
ついにバーモンドが切れた。俺にはまったく命中せず、自分の顔だけが泥だらけになるんだから、それは我慢できないだろう。
「俺らだってわけわかんねぇよ！　なんでテメェに泥団子が当たらねぇんだ！」
逆ギレするデック。
「さぁ？　そっちの腕が悪いのでは？」
白々しくそう返すと、デックの顔がみるみるうちに赤くなっていった。
「お前！　魔力もない落ちこぼれのくせに生意気なんだよ！」

そして、腰の木刀をデックが抜く。
おいおい、本気か？　泥団子ならともかく、それはちょっと冗談にならないぞ。
「……今なら些細ないたずらで済むけど、流石に木刀を出したら君もまずいんじゃない？」
「はんっ！　なんだ、ビビってるのかよ？」
いやいや、これでも俺は親切心で言ってるつもりなんだがな。
「どう捉えてくれてもいいけど、これでも僕は一応貴族だよ。木刀で殴って怪我をさせたら、言い訳が立たなくなるのをわかってる？」
「むぐぅ……」
デックが声をつまらせ、助けを乞うように、ハンカチで顔を拭っていたバーモンドを見た。
その視線に気づき、バーモンドは慌てて表情を取り繕って言う。
「くそ、泥がこんなに……ふ、ふん、なるほど、家の威光を振りかざしてこの場を逃れようって手ですか。だけど残念でした！　僕はロイス様から許可をもらっているんです。もし今後、町でジンに会うことがあったら、好きに痛めつけて構わないってね！　仮にお前が屋敷で騒いでも、ロイス様がなんとかするって約束してくれたんですよ！」
え～……こいつ、本気か？　兄貴の差し金だったってのは特に驚くことじゃないけど、そんな言葉を鵜呑みにするかね？
大体、兄貴に問題をもみ消すほどの権限があるわけないだろう。あいつ、まだ六歳だぞ。こんな

ことがバレたら、面倒なことになるのは兄貴の方だと思うんだけど。
「へ、へへ、流石は狡賢い……いや、抜け目のないラポムだ。というわけだから、諦めろ。お前をギッタンギッタンに痛めつけても、助けてくれる奴はいないぜ！」
しかし、デックはバーモンドの言葉を疑っていないようで、もうやる気まんまんだ。面倒だな、本当。
「はぁ、本当に考え直す気はないのかな？」
「うるせぇ、死ね！」
デックが木刀で殴りかかってきた。殺したら洒落にならないだろうに。
ま、こんな力任せの攻撃、当たるわけないんだけど。
躱し方は何通りもあったが……とりあえず、右足を引き上半身を逸らす。
ビュンッと風を切る音がして、木刀が地面に叩きつけられた。そこそこいい音をさせるじゃないか。基礎を固めれば、それなりに剣を扱えるようになるかもな。
もっとも、それは今後の話。今は目を瞑っていても余裕で避けられる。
「こ、このチョロチョロと！」
デックは続いて、木刀を振り上げてきた。ちょっと大振りすぎるな。こちらは一歩下がって回避。
木刀が空を切り、勢い余ってデックの足が縺れた。体の大きさに対し、下半身の筋力が追いついていない証拠だ。

「くそっ！　オラ！　オラ！　オラ！」
それからもデックは、何度も何度も力任せに木刀を振り回してくる。まるで出来の悪い風車を見ているようだ。
だけど、そんなことを繰り返していたら体力が持つわけがない。大体、攻撃っていうのは、空振りの方が体力を消耗する。
「はぁ、はぁ、ち、くしょう……」
デックはとうとう肩で息をして膝に左手をつき、木刀を持ったまま右手で顎の汗を拭った。なんとも隙だらけなことである。俺は何もする気はないけど、もし戦場でそんなことしたら死ぬぜ？
「お、おい！　お前ら、ボーッと見てないで援護しろ！　なんのために武器を持ってるんだ！」
「あ、そ、そうだった！　え～と、土は我が子なり、脈々たる地脈の鳴動――」
杖を持っている奴が魔法を唱える。しかし、相変わらず長々とした詠唱だな。
「い、いやぁああ！」
そして、締まりのない声で、もう一人の小ぶりな木刀持ちが後ろから狙ってきた。正面からはデックが突きを繰り出してくる。
挟み撃ちか。多少は考えたようだが、もう一人はデックよりさらに弱いのであんまり意味がない。
ギリギリまで引きつけてひょいっと躱したら、少年にデックの突きが当たって転んでしまった。
「あ！　お、おい、大丈夫かよ！」

「う、うわぁあああぁあん！」
おいおい、泣きだしたぞ、マジかよ。でも、年を考えたらそんなものなのか……
「な、なんなんだお前！　なんでそんなに……」
強いんだ、とデックは言いたいのかな？　うーん、なんと答えたものか……
「僕は、魔法に関しては才能がないからね。だからその代わり、剣術を教えてもらっているんだ」
これは嘘ではない。俺は最近、執事のスワローに剣の稽古をつけてもらっている。
魔法が使えないからって何もしないわけにはいかないからな。今の俺の年齢に合わせた内容だから物足りないものの、俺の知っている剣術とは異なる動き方を学べるから勉強になる。
「く、くそ！　仲間の仇だ！」
デックがそう叫び、再び突撃してきた。いや、お前がやったんだぞ、それ。
しかし、こいつも懲りないな、と思っていた時。
「す、ストーンバレット！」
斜め後ろからそんな声が聞こえた。ようやく杖持ちの魔法が完成したらしい。
ちらっと見ると、石礫が飛んできている。大きさは小石程度。あれだけ時間をかけてこれか……
さて、デックは俺の斜め前から突っ込んできていて、俺を挟んでその対角線上から石礫が飛んできている状況。偶然にも、またもや挟み撃ちが成立していた。
とりあえず横に一歩動いて石礫を避ける。

立ち読みサンプル はここまで

そこで気がついた。この方向で俺に当たらなかった場合は――
「ブボッ！」
「あーーーー！」
そうだよな、デックに当たるよな。しかも、もろに顔面だ。
デックはもんどり打って地面に倒れてしまった。
「そ、そんな、大丈夫!?」
杖持ちの少年が駆け寄り、泣いていたもう一人も泣きやんでデックに近づいた。バーモンドは何がなんだかわからないって顔だ。
デックは倒れたままピクリともしないが、息はしている。
目を回して気絶しただけだな。問題なさそうだし、俺はこのまま退散させてもらおう。
まったく、面倒な連中だったな――

門に向かって歩いていると、よく知る声が聞こえてくる。
「坊ちゃま！」
声のした方を向くと、案の定、執事のスワローが駆け寄ってきていた。
でも、なんでこの町にスワローが？
「あれ？　どうしたの？」